19世紀ポーランドにおける工業労働者の形成

── ウッジ繊維企業の労働者 ──

The Origin and Formation of Workers in Lodz Textile Industry in the 19th Century

藤　井　和　夫

This paper addresses the origin and process of the formation of textile workers in Lodz. The rapid expansion of population in Lodz accompanied the dynamic development of the textile industry in the second half of the 19th century. The main source of population growth was the inflow of peasants from villages, where the price of labour was relatively low, and craftsmen from small towns moving into the city. Living in the suburbs of Lodz, at first they were doing odd jobs and were later employed by the textile industry.

Kazuo Fujii

JEL：N74
キーワード：ポーランド、ウッジ、繊維工業労働者、農民の都市移住

I　はじめに

筆者はこれまで、19世紀のポーランドにおける経済発展あるいは工業化という問題を考えるとき、とりわけウッジ地帯の繊維工業が経済的あるいは社会的な意味で最も重要な産業であると考え、その成立と発展について様々な角度から分析をおこなってきた。そして、ウッジ繊維工業成立と発展の主体的な要因としての初期ポーランド王国政府の政策と企業家たちが果たした役割を強調し、客観的な要因としての販売市場（特にロシア市場）の問題に注目してき

た[1)]。本稿が取り扱うのは、それらの研究ではいわば暗黙の前提となっていた工業労働力の形成と拡大の問題である。

一般に、歴史の中で工業化現象が研究課題とされるとき、伝統的には、工業化が達成されるための条件として資本・市場と並んで労働（労働力）が分析されるのが常であったし、21 世紀を迎えた今日でも、労働力の問題は改めて、また形を変えながら、社会の中の重要な関心事であり続けている。すなわち、現在の経済活動のグローバル化の中で注目されているのが、戦略的に最も重視されるようになった製品価格に直接反映する労働力コストの各国・地域間の大きな格差の問題であり、さらに目下社会的に最重要課題となっているのが、それに深く関わる失業率の問題である。

本稿が対象とする 19 世紀は、いわゆる産業革命を背景に、イギリスに続いてヨーロッパのあらゆるところで大量の工場労働者が誕生し、社会生活の主人公に躍り出た時代であった。多くの地域では、彼らは社会の全く新しい階層あるいはグループをなす人々であり、当時の経済活動の中核をなす製造業躍進の担い手であると同時に、彼らの出現が貧困や都市問題といった社会問題を顕在化させることになった。それゆえに工場労働をめぐる諸問題は、企業家にとっても労働者にとっても、19 世紀の社会における極めて重要な課題となっていた。

ポーランドのような後発工業国では、工業労働者の形成過程は、イギリスをはじめとする先進工業国の場合とは異なったプロセスあるいは時間的経緯をたどることになる。そこには、いわゆる農民層の分解の遅れや不徹底という現象のように、「エルベ川以東」と称される東中欧の工業化に共通した後進性と特質が見出されるとともに、各国・各地域に特有な社会経済的特徴が現れてくるであろう。そのことを念頭に置きながら、本稿では 19 世紀ポーランドのロシア領の一角ウッジ市における繊維工業の労働者がどのように形成されていったかという問題に絞って考察を行う。その意味は、工業労働力形成プロセスの特質が各産業分野によって大きく異なることを踏まえて、繊維工業という工業化初期の主軸産業を分析対象とすることで、労働力形成という観点から 19 世紀

1)　たとえば藤井和夫【1989】、同【2000】

ポーランドの工業化過程を西欧を含む他の地域のそれと比較するひとつの足がかりを得ようということであり、さらに、労働力形成の特質が地域の経済的・社会的・政治的な全体構造と深く結びつくことを踏まえて[2)]、19 世紀ポーランドの経済社会の特質をウッジという地域における繊維工業労働力の形成過程の中に探り出すひとつの試みでもある。

II　ウッジ繊維工業労働者数の増加

ウッジの繊維工業は初期ポーランド王国政府による工業育成政策を直接のきっかけとして 1820 年代から成長し始め、1830 年代に反ロシア蜂起の挫折後しばらく停滞した後、1850 年代から綿工業を中心に再び成長期を迎え、1870 年代末以降本格的な発展期を迎える[3)]。市の人口も繊維工業の発展につれて増加し、Puś の集計によれば 1820 年に 767 人であった市人口は、1832 年 4,238 人、1841 年 16,415 人、1850 年 15,565 人、1860 年 29,756 人、1870 年 47,650 人、1880 年 59,400 人、1890 年 130,000 人、1900 年 283,200 人、1911 年 512,472 人と急成長しており、20 世紀初頭のウッジ市は、ポーランドでワルシャワに次ぐ人口を有する一大工業都市になっていたのであった[4)]。

その激しい人口増加は、3 つの要因に分けて考えることができる。ひとつはウッジ市自体が市域を広げたことによる人口増加である。ウッジ市がポーランド王国政府の工業育成策を受けて「工業区」となったのは 1820 年であり、その時の住民数は 767 人、家屋の数は 106 棟だったが、当時の市の面積は 828 ヘクタールであった。その後市域は、翌 1821 年に 1016 ヘクタールに拡大し、その後も 1825 年 2205 ヘクタール、1840 年 2739 ヘクタール、1906 年 3811 ヘクタールと 4 回拡大して 1915 年まで維持された[5)]。後述するように、市の周辺地域にはかなりの人口集積が見られたので、この市域の拡大によって増大する人口も多かったはずである。

---

2)　Dlugoborski【1977】s.235
3)　藤井和夫【1989】89 頁
4)　Puś【1998】s.26-27、藤井和夫【2002】5 頁
5)　Jaskołowska【1973】s.41-42

次に考えられる人口増加の要因は、人口の自然増である。それは着実に人口を増やすであろうが、このウッジ市のような極めて急速な人口増加の主たる要因とは考えにくい。ウッジ市の人口増加がいかに激しいものであるかは、たとえば 1800 年から 1910 年の間のヨーロッパのいくつかの都市の人口増加が、ライプツィッヒが 20 倍、ブダペスト 16 倍、ミュンヘン 15 倍、ベルリン 12 倍、ブリュッセル、グラスゴー、ケルンがそれぞれ 10 倍、ポーランドのワルシャワで 10 倍弱なのに対して、その間のウッジの人口増加は実に 600 倍に達している[6)]。市の 1 ヘクタール当たりの人口密度の変化を見ても、1821 年 0.8 人、1840 年 7.4 人、1900 年 107.7 人、1906 年 86.3 人、1910 年 107 人、1913 年 132.8 人と急増しており、とくに 19 世紀後半になると、1872 年のポーランド王国全体の 1 平方キロメートル当たりの住人数は 51.3 人であり、その中ではウッジ市を含むウッジ郡はかなり集中も進んで 137.6 人となっていたが、それでもワルシャワ市を含むワルシャワ郡の 243.5 人の半分程度でしかなかったのに、同じ数字を 1897 年について見てみると、王国全体で 71.9 人と増え、ウッジ郡は 453.5 人と 515.0 人のワルシャワ郡に近づいてきており、さらに 1913 年になると、王国全体で 102.5 人に対して、ウッジ郡は 778.5 人にも増えて、ワルシャワ郡の 778.4 人を上回るまでになっている[7)]。ポーランド王国の中でも飛び抜けてウッジおよびその周辺の人口増加が激しかったことがわかるであろう。こうした急激な人口増加には、自然増以外の要因が大きな意味をもったはずである。

そこで 3 つ目に考えられる人口増加の要因は、市外からのウッジ市への流入者、移住である。その数字を含めて 3 つの要因に分けた人口増加の実態を知ることは残された史料の制約から難しいが、様々な人口データを総合的に利用した Jaskołowska の推計があるのでそれを見ると、工業区の建設直後の人口増加の 90%以上が移民によるという時期を例外だと考えても、それ以降も移住による人口増の割合は 50%から 70%と、常に人口増加の半ば以上の割合を占めていた。ウッジは繊維工業の発展につれて、外部から夥しい人々を吸収しながら、巨大都市へと成長していったのである。

6) Jaskołowska【1973】s.42
7) Nietyska【1986】s.284

第 1 表　ウッジの人口増加の推計　　（単位は千人、( ) 内は%）

年	増加人口総計	自然増によるもの	移住によるもの	市域拡大によるもの
1821 − 1840	19.4	0.9　(4.6)	18.0　(92.8)	0.5　(2.6)
1841 − 1906	308.8	89.0　(28.8)	157.2　(50.9)	62.6　(20.3)
1907 − 1913	177.0	54.5　(30.8)	122.5　(69.2)	−　(−)
1821 − 1913	505.2	144.4　(28.6)	297.7　(58.9)	63.1　(12.5)

出所：Jaskołowska【1973】s.43

では、どのような人々がウッジ市に吸収されていったのであろうか。Janczak によれば、次の第 2 表に見られるように、人口のほぼ 4 分の 1 を占める有業者人口の比率において、工場経営者および親方や熟練労働者にあたる第 2 項目（przemysł i rzemiosło）の人口と不熟練工場労働者たる工場使用人や日雇いの第 5 項目（służący i wyrobnicy）の人口をあわせて、1820 年 51.0%、1825 年 63.7%、1828 年 73.7%、1845 年 85.6%、1850 年 88.0%、1855 年 90.9%、1859 年 89.7%、1863 年 92.0%と次第に増えつつ圧倒的な割合を占めるに至っており、とくに純粋の雇用労働者である後者の比率は、1850 年以降 32.3%、56.9%、64.1%、78.1%と急増している。後に見るようにウッジ市の工業のほとんどを繊維産業が占めていることとあわせて考えれば、ウッジが典型的な繊維工業都市として発展を遂げ、その工場労働者の急増によって人口を急速に増していたことが確認できる[8)]。ウッジ市の人口増加の主たる要因をなした市への移住者とは、繊維工業労働者だったのである。

第 2 表　ウッジ市の職業構成　　（単位：人）

	1820 年	1825 年	1828 年	1845 年	1850 年	1855 年	1859 年	1863 年
1　農業	74	80	79	43	101	120	140	48
2　工業・手工業	44	182	437	1337	2466	2082	1703	1203
3　商業・飲食業	27	56	73	164	381	385	462	609
4　公務員・軍人	2	2	4	52	50	53	81	33
5　使用人・日雇い	63	60	−	206	1430	3480	4263	6750
有業者合計	210	380	593	1802	4428	6120	6649	8643
総人口	767	1004	4273	14585	15565	24560	29450	33417

出所：J.K.Janczak【1997】s.62

8)　Janczak【1997】s.62

ただ繊維工業労働者の増加といっても、そのテンポには産業の動向と歩調を合わせて比較的大きな波があった。繊維工業の中でも、最初に労働者を引きつけたのは毛織物工業の発展であった。1820 年以降、プロイセン領、ポーランド王国、ザクセン、チェコなど広い範囲から職人の移民が流れ込み、同時に並行して国内からも労働者が市に流入しはじめた。当時の労働者供給の特徴は、それが地域的であったことと、羊毛工業における熟練労働力が中心であったことである。王国内で熟練労働者と不熟練労働者を供給したのは、早くに手工業を復興させるかあるいは工業を発展させはじめたマゾフシェ州やカリシ州であった。重要なのは、流入する彼らは農村に多少とも土地を持っており、まだ片足を農業においた毛織物生産者だった点で、雇用労働市場の形成にあたっては、家族の補助的な役割が大きな意味をもったと思われる。1830 年までは労働力需要がその供給にまさり、政府所有都市と私有都市で労働者獲得をめぐる競争が生まれた。しかしその後羊毛工業は長い不況を迎え、労働需要も縮小して、人々に他の場所への再移住か農村の家族のもとへの帰郷を迫ったのであった[9)]。

1829〜1834 年の不況の後に、ウッジでは綿工業の発展にともなって雇用労働増加の次の局面が始まった。技術の発展とともに急成長する綿工業中心地すなわちウッジ市および同地帯が多数の雇用労働力を吸収しはじめ、労働市場はポーランド王国全体に拡大した。熟練労働力も不熟練労働力も、1860 年代までウッジの労働力市場の需要は増え続け、毛織物生産者の綿工業への移動も見られた[10)]。その後 1870 年代末、ポーランド王国の繊維工業にとって有利な市場環境（ロシアの保護関税政策）が生まれ、同時に工業が生産の機械化を進めた結果、サービスや工業での雇用を目指す余剰人口の都市への流入がますます激しくなり、このプロセスは 70 年代末から 90 年代初めにかけて強まった[11)]。

ウッジ市のこのような人口増加を大きな要因としながら、19 世紀の末にポーランド王国を都市化の波が襲うこととなった。ポーランド王国の人口 1 万人以上の都市の王国全体の人口中に占める割合は、1870 年の 8.6%から、1900 年

9) Missalowa【1967】s.52-53
10) Missalowa【1967】s.53
11) Puś【2003】s.12

17.5%、1910 年 18.3%と拡大し、また人口の規模を問わず法制上の都市の王国全人口に対する割合は 1909 年に約 30.6%に達していて、その割合はイギリスの 78.0%やドイツの 56.1%あるいはフランスの約 40%と比べれば低いものの、すでにハンガリーの 23.0%、スウェーデンの 22.1%、イタリアの 22.1%を上回るものであった[12)]。さらに付言すれば、もともとあまり人口の多い国ではなかったポーランド王国は、19 世紀における人口増加率がヨーロッパの中でも最も高い地域のひとつになっていたのである[13)]。

本節の最後に、Puś の整理によりながらポーランド王国の中でのウッジやその繊維工業の位置を確認しておこう。ここではウッジ市の他、パビャニツェ、ズドゥンスカ・ヴォラ、ズギェシ等の小都市を含むウッジ地帯について見る。その理由は史料の制約の他に、後述のようにウッジ市に関して、その市外の周辺地域との経済的なつながりの意味が大きいからである。

ウッジ地帯はポーランド王国の工業生産額の 1879 年 41.6%、1893 年 36.6%、1904 年 41.2%、1913 年 37.2%、労働者数の同じく 27.0%、30.6%、35.4%、33.5%と、工業生産額では王国の 40%弱を、労働者数では約 3 分の 1 を占める重要な工業地帯となっていた[14)]。繊維工業に限って言えば、ポーランド王国の中でウッジ地帯は、繊維生産額で 80%弱、労働者数では 70%強の割合を占めていた[15)]。そのウッジの工業の中では、生産額でも労働者数でも、繊維工業がほぼ 9 割の割合を占めていたのである[16)]。なお繊維業中心なので、重工業地帯と比べれば、工場の動力馬力数の割合は 1870〜90 年代には 30%を切っていて特に大きくない。その後は労働者の割合とほぼ同じであった[17)]。ちなみに労働者一人当たりの馬力数は、ポーランド王国の中では重工業地帯にあたるソスノヴィェツ・チェンストホヴァ地帯が、1879 年 0.38 馬力（以下同じ）、1893 年 0.86、1904 年 1.12、1913 年 1.81 であったのに対して、ウッジ地帯は

12) Żarnowska【1977】s.257-258.
13) Gross【1979】s.246
14) Puś【1977】s.52-53
15) Puś【1977】s76
16) Puś【1977】s104-105
17) Puś【1977】s.52-53

1879 年 0.11、1893 年 0.45、1904 年 0.67、1913 年 0.91 であり、それはポーランド王国全体の 1879 年 0.19、1893 年 0.46、1904 年 0.67、1913 年 0.98 とほぼ同じかやや下回っていた[18)]。繊維工業ゆえのこの状況は、労働者数と同地帯の工業の発展とがいっそう密の関係をもつことを示唆するものでもあろう。

次に全体としてポーランド王国の中で繊維工業がどのような意味をもっていたかを見ると、生産額でも労働者数でも、繊維工業は 40%強の割合を占めて、ポーランド王国の最も重要な工業部門となっていた[19)]。ちなみに、ロシア帝国の繊維工業の中でのポーランド王国のウェイトを見ると、生産額では 1870 年の 7.4%から 1910 年の 21.4%と次第に高まっており、労働者数でも 1870 年の 7.4%から 1910 年には 17.3%となっているが、その割合は工業全体でのウェイトを若干下回るものであった[20)]。

III　ウッジ繊維工業労働者の出自

さて前節でウッジ市の人口急増の事実と、それが主として繊維労働者の流入によるものであることが明らかとなったが、では彼らは一帯どこからやってきたのであろうか。まず、労働者の出自を示すデータが比較的に利用可能な 1864 年時点でのウッジ市の定住人口の中の労働者の出身地を見てみよう。繊維熟練労働者（親方、職人だけでなく徒弟も含む）3725 人、不熟練労働者 1722 人および使用人 służba 1062 人（うち少なくとも 50〜60%は繊維工業で糸巻き工や梳毛工の賃仕事に従事）の出自を知ることができる。熟練労働者の 3725 人のうち 95 人はいわゆる独立親方で、当時問屋制前貸しに連なって工場か商人のための生産をおこなっていた。そのうち 3462 人は種々の専門家として繊維工場に雇用された熟練技術を持つ親方もしくは職人で、168 人は同職組合に登録された徒弟で、多くは工場やマニュファクチュアで働く熟練技術を持つ若者であった。一方、日雇い（不熟練労働者）も使用人も、当時多くの不熟練労働者が非定住人口として居住していた事実から、ここでの定住人口の数字は不熟

18) Puś【1977】s.55
19) Puś【1977】s.90-91
20) Puś【1977】s.172,198

練労働のごく部分的な数字でしかないことに注意しなければならない[21)]。第3表はその熟練労働者の出自を示したものである。

第 3 表　ウッジ繊維工業熟練労働者の出自　　（1864 年、定住人口）

出自	独立親方	熟練労働者	徒弟	計
ポーランド王国	35	2002	160	2199
ポズナニ公国		7		7
シロンスク（シュレージエン）		19		19
オーストリア領	5	66		71
チェコ	28	532	2	562
モラヴィア		23		23
フランス		2		2
バーデン		34		34
バヴァリア（バイエルン）		8		8
プロイセン	6	291	3	300
ザクセン	10	342		352
ロシア		6	1	7
その他	9	118		127
不明		12	2	14
計	95	3462	168	3725

出所：Missalowa【1967】s.45

ウッジの繊維工業に特異なザクセンやチェコからの移住労働者の数が目立つが、全体の 3 分の 2 はポーランド王国の出身になっている。王国出身の熟練労働者 2199 人の 95%にあたる 2001 人がウッジが属するワルシャワ県出身（なかでもウッジの北 8 キロメートルのウェンチツァが 1230 人で 56%、南西 10 キロメートルのシェラズが 287 人で 15%弱を占める）で、そのうち都市出身は 1581 人（79%）、農村出身は 420 人（21%）であった[22)]。

次に不熟練労働者を見てみよう。不熟練労働者の場合、約 70%がポーランド王国出身者であり、その 1189 人のうち 648 人（54%）が都市出身で、541 人（46%）が農村出身であった。また、女性労働者が不熟練労働全体の 53%、ポーランド王国出身では 47%を占めている。ちなみに両者以外の使用人層の女性の割合は 87%になり、多くは都市出身であった[23)]。

21）Missalowa【1967】s.44-45
22）Missalowa【1967】s.46
23）Missalowa【1967】s.49

第 4 表　ウッジ繊維工業不熟練労働者の出自　　（1864 年、定住人口）

出自	男性	女性	計
ポーランド王国	631	958	1189
プロイセン領	14	39	53
オーストリア	9	9	18
チェコ	28	85	113
フランス	1	2	3
オランダ	1		1
プロイセン	60	89	149
他のドイツ諸国	48	100	148
不明	19	29	48
計	811	911	1722

出所：Missalowa【1967】s.45

さらに、1864 年の段階で、都市出身であることが明らかな熟練および不熟練労働者 2166 人のうち、ウッジで生まれたという繊維労働者が 1017 人いたことが注目される。より詳しく見れば 2166 人の中で、熟練労働者 1581 人の 50%にあたる 802 人がウッジ生まれであり、不熟練労働者 585 人の 37%にあたる 215 人が同じくウッジ生まれであった。彼らはウッジに定住する繊維労働者の第 2，第 3 世代にあたる[24)]。

上記は 1864 年という一時点でのウッジ繊維労働者の出自を見たものだが、1820 年から第 1 次大戦までの期間を通じてのウッジの繊維労働者の出自に関しては、全体としてどのようなことが言えるであろうか。Gross は 19 世紀ポーランドの労働者階級の最大の源泉は土地無し農であるといい、次いで工場との競争に敗れて崩壊していく手工業者層、そして 3 番目にポーランドにやってくる移民であることを指摘し、さらに少数で大きな意味はもたないものの没落した貴族もそれに加えられるとしている[25)]。ウッジの繊維工業史研究の先駆者のひとりである Missalowa も、同じように労働者階級の基本的な供給源は主として農村であったと指摘しながら、ウッジの繊維工業労働者の出自について次の 4 つのグループをあげている。

第 1 のグループはもちろん農民である。ポーランド王国は、1895 年から 1912

24) Missalowa【1967】s.49-50
25) Gross【1979】pp.246-247

年の時点でも 57〜58%とフランスの 44.6%（1906 年）等と比べればまだ農民人口の多い国であった[26]。ウッジやパビャニツェ、オゾルクフ、ズギェシなどウッジとともに繊維工業地帯を形成する周囲の工業都市の周辺にも多数の村が存在しているが、基本的にほとんど全ての村からそれらの都市の工場やマニュファクチュアに、あるいは定職の、あるいは季節労働の賃労働者として働きに来ていた。なかには村をあげて繊維手工業や工場での賃仕事に特化するケースもあったという。彼らはおそらく土地所有・保有から追放された人々であって、工場で働くことによってようやく家族とともに生まれ育った村の家で暮らすことが可能だったのであり、その生活は完全に土地から切り離されたものになっていた。Missalowa によれば、このような形で村に居住していた労働者が都市に完全に移り住むことは、残していく住んでいた家や借地に愛着を感じなければ、実際比較的簡単であった[27]。

ただ時期的には、1864 年の農奴解放に至るまでの時期、農民の地主への経済的従属が工業労働への直接の移動を妨げる要因となっていたために、農村はわずかな程度にしか工業のための労働力の貯蔵庫にならなかった[28] のであり、むしろ 1770 年代末に農村からウッジへ大量の人々の移動が始まり、高い水準で 1880 年代から 90 年代の初めまで続いたとみなされる。Żarnowska は、ウッジへの農村からの流入はもっぱら地元のカリシ県の 4 つの郡からに限られていたと見ており、その数を年間 8 千人と見積って、1897 年には農村からの移住者はウッジ総人口の 30%近くになると推測している。第 1 次大戦の時期に至るまで、ウッジの労働者にはワルシャワよりも農村出身者が多かったのである[29]。

第 2 のグループは、ウッジに特有とも言える国外からの繊維手工業者の流入である。繊維労働者の供給源として、ウッジの場合は、繊維全般にわたる専門家の、旧ポーランド領で今はプロイセン領となった地域や、主としてチェコ

26) Żarnowska【1977】s.259
27) Missalowa【1967】s.32-39
28) Puś【2003】s.9-10
29) Żarnowska【1974】s.145-148

やザクセンから、そしてごくまれにイギリス、フランス、スイスといった外国からの合計すると相当数の移住があった。その移住の経緯や経済状況は様々であっても、彼らはウッジの多数の生産者、企業間の競争を通じて工場労働者化し、とくに熟練工場労働者となっていった。そしてウッジ労働者の多民族的特徴を形作ったのである[30)]。このグループ形成の詳細はすでに分析したところであるが[31)]、主としてドイツ地方（プロイセン、ザクセン、ババリア、ナドレニア）そしてチェコやオーストリアから入植した移民は、その数についての大きな論争にも関わらず、10 万人を下らないと考えられる。そして 19 世紀 20〜30 年代に入植した後、彼らの多くは独立毛織物手工業者として生産を始めたが、問屋制ついでマニュファクチュアや最後には機械化された工場生産に組織化されるにつれて、その多くは熟練工業労働者に変わっていった。もちろん移民の中には経済的に成功して工場の所有者となる者もいたが、高い熟練を持つ他の人々はウッジ地帯のマニュファクチュアや工場で技術監督者の役割を果たした[32)]。

第 3 のグループは、近隣小都市に住む職人たちである。繊維工業の成立は、特にギルドの織物工や紡績工を中心とする独立手工業者を衰退させ、彼らはマニュファクチュアや工場に職を求めなければならなかった[33)]。そしてやや時をおいて、1860 年代・70 年代初めのウッジ繊維工業労働者の圧倒的多数は同市出身となっているが、その多くは 1840 年代・50 年代、そしてとくに 1865 年以降にウッジの熟練労働者層を供給し、貧困化した親方の子孫であった。ウッジにおいては、1880 年代、1890 年代に生産年齢になる人々が、手工業者や家内織物工の子孫であったということが特徴的であり、独立小織物工の困窮化と工場労働者層への流入は 1990 年代にもなお続くのである。実はこの点が、ウッジの工場労働者の社会構造を際立たせている点で、ワルシャワでは困窮化した親方の息子たちは、まず何より手工業での賃仕事に向かい、工場で働こう

30) Missalowa【1967】s.32-33
31) 藤井和夫【1989】第 2 章
32) Puś【2003】s.13
33) Puś【2003】s.12-13

とはしなかったのである[34)]。

最後に第 4 のグループとして、例外的なケースとしてだが、没落して困窮化したシュラフタ（小貴族）の子弟も工場労働者化した[35)]。さきに挙げた Gross も、1831 年と 1864 年の反ロシア暴動の後、反乱に加わった中小貴族の領地が没収され、その家族と領地を失った貴族の一部が工場労働に従事したことを指摘している[36)]。しかし、ここでは手工業者の場合とは逆に、ワルシャワと異なってウッジではシュラフタ層は労働者階級の供給源としてはほとんど何の役割も果たさなかったとみなすべきであろう[37)]。

IV　農村からの労働者流入のプロセス

前節において、初期にはウッジの繊維工業労働者を形成した源泉は国外から移住してきた親方や周辺小都市の職人層であり、後半にはその第 2，第 3 世代に加えて、新たに大量に周辺農村から流入する農民たちであったことを確認した。本節では農民の繊維工業へのかかわり方をもう少し詳しく見てみよう。

たしかに 19 世紀の半ば以前、農民がポーランドの繊維工業での賃労働に直接移ることは非常にまれであったが、しかし一方で工業地帯では、工業関連（原料や他の物資）の輸送や工業地帯で間接的に工業にかかわるの他の賃労働（道路建設等）に農民が従事して、何らかの形で繊維工業に関係を持つことはかなりしばしばみられた[38)]。Śmiałowski によれば、すでに 1840 年代にウッジ周辺の 3 つの郡において農民はかなり広範に賃労働に従事しており、あわせて 48%の農村で農業での賃労働が見られ、それ以外に 31%の農村では農業以外の仕事で賃労働をしていたという。その内容が把握された 473 村のうち、123 村と一番多いのが都市での何らかの賃労働になっており、輸送（101 村）や林業（76 村）よりも多いのである。さらに工場やマニュファクチュアでの

34) Żarnowska【1974】s.145
35) Missalowa【1967】s.35
36) Gross【1979】 s.246-247.
37) Żarnowska【1974】s.145
38) Puś【2003】s.14

賃労働が 48 村、農村での手工業・織物業が 28 村となっている[39)]。土地なし農や小農の間で、相当程度賃労働が広がり始めており、それもこの段階で繊維工業にかなり近い職種が驚くほど多いのである。

そもそも 19 世紀のポーランドでは、農村人口の中で広く自家用の手織の毛織物・麻織物生産が拡がり、多くはないが一部は地域の市場目当てに生産が行われていたことを思い出さねばなるまい。ポーランド王国で 1850〜1870 年に約 14 万台の農村の織物機が使用されており、麻織物では王国の麻織物生産の実に 40%が農村で生産されていたのである[40)]。都市への出稼ぎにしろ、農村での繊維手工業にせよ、農民と繊維工業とのかかわりは、想定される以上に早期にかつ広範に見られたと考えるべきであろう。Missalowa も、ウッジ周辺の郡部（農村地帯）を調べてみると、最も広く行われていた農民の賃仕事は都市の工業（主に繊維工業）に関係したものであり、その他都市内あるいは都市と外部との輸送に関わる農民も多く、結局、土地なし農や小作農が都市に出て賃労働をするというのが一般的な形態となって、農民と都市の工場労働との結びつきは強まる一方であったという。また先に見たように 1864 年にウッジ繊維工業の不熟練労働者あるいは熟練労働者の一部にこれらの村出身のウッジ市に定住する労働者がいるが、彼らはかつて活発に繊維工業の賃仕事に出稼ぎしていた農民たちだったのであり、1846 年から 1864 年の 20 年足らずの間にこのプロセスが進行していたことを確認できるとも述べている[41)]。もちろん工業都市周辺の旧来の半農の小都市住民自ら、あるいはその子弟が、工場の親方のもとに学んで熟練労働者となったケースも多く、彼らは農業を捨てて完全に職人となるか、あるいはマニュファクチュアや工場に賃仕事をする織工として働いたのである[42)]。

1860 年代・70 年代になると、ウッジ市の周囲を囲む農村に、より遠方のピオトゥルクフ県、カリシ県、ワルシャワ県などからの農民の移住が強まった。

39) Śmiałowski【1973a】s.48-52
40) Puś【2003】s.13
41) Missalowa【1967】s.40-41
42) Missalowa【1967】s.34

彼らはその市周辺農村に住みながらウッジ市内の工場で働くか、その周辺農村で農業労働に従事した。しかしこの段階でウッジ市に定住する農民はまだ少なく、かなりの農民は都市に近づきながらも周辺農村にとどまって、農村社会との経済的、社会的なつながりを完全に絶とうとはしなかった。19 世紀末に至っても、労働者のかなりの部分はウッジ、とくにヴィゼフのような郊外の工場で働きに近くの農村から通っていたのである。結局、1880 年代以降も、農村出身でウッジに住み着いた農民でも農村との関係を最終的になくしてはおらず、特に工場で職がないときは賃仕事を探しに農村に戻っているのである。ウッジ繊維労働者の家族調査でも同じ結論が得られ、1890 年代末でもかなりのグループ（5 分の 1 以上）は単身労働者で、主に農村に残した家族と長い別居生活をしていた[43)]。

最もこれも世代による差が大きく、1850 年代・60 年代生まれでウッジに来る農民は、その時未成年であった者は少なく、成人で家族連れであることもまれではなかったし、工場に勤める前は農業関係で働いていた。しかし世紀末 4 半世紀から 1914 年までにウッジに来た労働者の世代は、農業労働者がウッジの工業に流入するという例は次第に減って、小規模農業とは完全に縁を切っていた。彼らの多くは 10 歳代以下の小作農の子どもで、その多くはもはや農業で暮らしていこうとは思っていなかった。農村出身といっても、この世代はごく小さい子供時代を農村で過ごしたに過ぎず、そうでない場合も農村で農業以外の、たとえば農村の職人や都市郊外の手工業での雇い人等で生計を立てていたのである。また 19 世紀末から 20 世紀初頭は、父親がすでに労働者であった割合が以前より高まる[44)]。

先に述べたように、農民がいきなり都市内部に住むというのは必ずしも一般的ではなく、まずは都市周辺部に住みながら都市の工場で働くというケースもよく見られたが、そうした流入農民が住み着く都市周辺の農村が、そのまま大都市の繊維工業に働く労働者の巨大な居住区に転化するということもよく見られた。ウッジでいえばホイヌィやヴィゼフといった村がそれにあたる。ウッジ

43) Żarnowska【1974】s.146-147
44) Żarnowska【1974】s.148-149

の繊維工業に雇用されることで生計を立てるようになった農民たちが、それらの村の細かく分けられた荘園や農民保有地を買い取って集まり暮らすようになるのであが、1860 年代・70 年代から両農村はウッジの労働者居住区に移行していった。とくにホイヌィはウッジの人口増加に対して大きな役割を果たしており、ウッジに流入する工業労働者がいったんはこの村に住み着いた後にウッジ市内に定住するようになったり、不況期には逆の人口移動があったのである[45)]。また同じようなウッジ周辺の村であるバウティは、20 世紀初頭にはなんと人口 10 万人を越える驚くべき村になっていた。他のヴィゼフ、ホイヌィ、カロルフといった村々も同じような状況であった[46)]。

19 世紀末から 20 世紀初頭には、大規模な近代的な繊維企業（そのうちポーランド王国で最大のものは 5 千人から 9 千人の労働者を雇用していた）が支配し始めるとともに、交通手段の発達によって工場労働者化する農村や小都市住人の移動性が増大して労働力市場の地域拡大が顕著となった。一方で市内に定住したり、周辺地区に居住する第 2・第 3 世代の労働者の数も増えていく[47)]。

ところで、ウッジに組織的な労働者募集がおこなわれたかどうかについての公式の資料はないが、よく行われていたのが、職人の行く居酒屋とか労働者が集まる酒場で行われる募集活動であった。時には工場主が新聞に募集広告を載せることもあった。また 1864 年にはウッジに使用人斡旋事務所 kantor pośrednictwa pracy służących 開設がアナウンスされている。その他にも私的な労働仲介所もあって、当時ウッジでは自由な雇用労働が広く広がっていたのである[48)]。

V　農村からの労働者流入の経済的背景

前節では農民がどのような形で都市の繊維工業に賃金労働者としてかかわっていったかというプロセスを見たが、本節ではそういう移住が発生する原因と

45) Missalowa【1967】s.15
46) Śmiałowski【1989】s.50
47) Puś【2003】s.16
48) Missalowa【1967】s.41、 Puś【2003】s.43.

なった経済的背景について検討する。農民が自らの社会を離れて賃仕事を求め、大量に大都市の繊維工業の労働者となってウッジに流れ込むには、まず農民が農村を離れる動機、もしくは農民を農村から押し出す要因がなければなるまい。さらに、都市に大量に流入するための工業の側での吸引要因があるはずである。まず前者、農民が農村を離れる要因から見ていこう。

そもそも農業に必要な土地を持たない農民は、何らかの形で労働を提供して賃金を得ることで生計を立てる以外にないが、たとえ土地を持っていても農民が工場労働に従事しようとする理由もあった。すなわち 1850 年のウッジ市当局の記録には、1848 年と 1849 年の厳しい不作の後、農民たちは季節労働に走ったが、その目的は、稼いだ金額を未払いの税金や小作料に回すためであった。そうした差し迫った事情から、ウッジに近いトマシュフの領地に住む農民が、年間に金属工業での賃労働で 12,000 ルーブルを稼いでいたところ、1851 年に最後の溶鉱炉の閉鎖が計画されると、激しく抗議して抵抗する例なども見られた[49)]。前節で見たように、すでに農民にとっては工場での賃労働がその生活に深く関わりはじめていたのである。

農民は、義務である賦役以外に、自分が所属する領地で農業関係の賃労働につくよりも、都市の工場に出稼ぎに行く方を好んだ。ラドムの地主は「農民は、何ら強制的な手段を用いなくても都市の賃労働にはいつでも出かけていき、そこで雇われて貧困生活を送る方を好む」と記している。農民が領地で働きたがらないことを知る領主（地主）は、郡長（それはしばしば領主自身であった）の許可なしに農民が村を離れることを禁じた 1818 年の決定に基づいて、農民が都市に賃仕事に出かけるのを禁じようとさえした[50)]。

なぜ農民が領地での賃仕事をいやがったのかは、すでに明らかであろう。そこでの支払が極めて悪かったからである。そのひどさは、地主制支持者のルドゥヴィク・グルスキ Ludwik Górski が 1860 年に地主たちが農民の怠惰や無能を理由にさらに賃仕事全般の価格を下げる目的で賃金の統一化が計画され

49) Missalowa【1967】s.39
50) Missalowa【1967】s.40

ていることを農民に対する恥ずべき搾取だと非難するほどであった[51)]。実際の支払金額を詳細に知ることは困難であるが、たとえばŚmiałowski によれば、1840 年代に領主の賦役つまり半ば強制的な労働に駆り出されたときの支払いは、刈り入れのような辛い仕事で 1 日 7.5 コペイカであったのに対し、雇われた農業労働者の場合は 2 倍の 15 コペイカであり、手工業の賃金は後者とほぼ同額であったという。しかしそれはむしろ最低基準で、実際の作業によって金額は増額され、後には次第に増額もされた。背景には労働者確保をめぐる農業と工業との競争があったのである[52)]。

1830 年代の不況以降は、ウッジの繊維工業にとって長期の労働力不足になっていたから、ウッジやその工業地帯は比較的に労働賃金の高い地域になっていた。そのため地主たちは、ウッジや他の都市は労働力を吸収し、一方農業労働力は慢性的に不足していると、嘆いている。ところが 1870 年代 80 年代になって、貧しい農民が大挙して都市に向かうようになると、ようやく状況は変わりはじめた。労働力供給の増大が大きな労働予備軍を作り始めたのである。ウッジの市長たちは、さらに農村領地での過重な労働負荷に反対し、地主の寛大さを要求した。こうして 70 年代 80 年代になると、ウッジのどの工業でも働き口の需要がその供給を凌駕したのである[53)]。

農村からの余剰労働力の流出が、それまで農民の都市への移住を制限していた公式の法的障碍を取り除いた 1864 年 3 月の農奴解放令から 10 年も遅れたことには 2 つの理由が考えられる。まず第 1 に、農村での生活手段に結びつく生活環境を放棄することに困難を感じる心理的な壁である。第 2 には、緩慢な国内市場の発展（農村での工業製品の少ない需要）や 1873 年の経済危機がもたらす 19 世紀 60 年末・70 年代にはまだ緩慢なポーランド王国繊維工業の拡大であった。土地なし農のさらなる困窮過程、農村での賃労働の見込みの欠如、そして他方でのロシアの 1877 年の保護関税政策がポーランドの繊維工業にロシア市場の需要をもたらしたことが、ようやく繊維工業と労働力需要のダ

51) Missalowa【1967】s.40
52) Śmiałowski【1973b】s.306-307.
53) Missalowa【1967】s.53-54

イナミックな発展をもたらしたのであった[54)]。

とはいっても、一方で農村においては 1864 年の農奴解放令によってかえって土地なし農が大量に発生していた 1870 年代末は、他方でロシアの保護関税によってロシア領内であったポーランド王国の繊維工業に広大なロシア市場が開かれ、あわせて繊維生産の機械化が進んだことによってウッジの繊維工業が本格的に拡大していく条件の整った時期でもあって、労働力の需要と供給の関係が一挙に逆転する状況にはなかった。農民にとって、相対的に賃金の低い農業で賃仕事をするインセンティヴは少なく、加えてますます農地は奪われるか限られてくるために、都市に出て賃労働の仕事を探そうとする圧力は高まり、農村を離れる傾向に大きな変化は生まれてこない。また工場主にとっては、労働力の供給が増えても、拡大する市場をめぐって企業間の競争が激しくなる中で、労働力確保の必要はむしろ強まるほどだったのである。

そこから発生したと考えられる二つの現象について最後に触れておこう。ひとつは女子労働力の利用についてである。ポーランドでは繊維工業発展の初期の段階から、問屋制に使用されるマニュファクチュア労働者や手工業者で男性が断然多い中で、補助的な労働では女性や 15 歳未満の子どもが働いていた。後に繊維工場の機械化が進むにつれて女性や児童労働の利用が可能となってその利用は本格化し、1865 年にポーランド王国の繊維工業の女性の割合は 24%に増え、最もダイナミックに発展した 1880〜1900 年には 40〜45%になっていた。なお繊維工業の部門によっては（例えば靴下生産部門)、女性の割合は雇用全体の 75%にも達している。子どもの雇用は、1882 年と 1885 年の布告による労働法で工場労働が制限されるまで、ほぼ 20%程度を占め続けた。最終的に 19 世紀 90 年代半ばにポーランド王国繊維工業で働く子どもの割合は 2.5%まで減らされることになったのである。企業主にとって女子労働と児童労働の使用は、19 世紀 80 年代にポーランド王国では女性の平均的な賃金は男性の 2 分の 1 から 4 分の 3 であり、子どもは 3 分の 1 から 5 分の 1 でしかなかったから生産コスト削減の確実な方法であった[55)]。

54) Puś【2003】s.14-15.
55) Puś【2003】s.91

具体的な例を示せば、ウッジ最大の企業家で、ウッジの工場で最大の労働者が働くカロル・シャイプラーの綿織物・綿紡績工場で、1885 年に 5006 人の労働者が働いていたが、そのうち 2642 人は女子労働者であった。さらに 394 人の染色・仕上げ工のうちの 68 人の女子労働者（うち 28 人は若年労働者）を加えると、シャイプラーの工場全体の 51%は女子労働者であった。1892 年には女子労働者は 5840 人中の 3093 人の 52%であった。1888〜1900 年に女性雇用は常に 50%を越え（1888 年 52.6%、1889 年 51.3%、1900 年 51.3%）、1904 年にようやく 45%の水準に下がった。同じく大企業のイズラエル・K・ポズナンスキの工場では、1885 年に 1965 人雇用するうち 1195 人は女性であり、捺染・仕上げの 130 人の労働者のうち 60 人は女性、つまり従業員全体で 46%が女性であった。1892 年にはポズナンスキ工場の 4017 人の労働者のうち 2513 人、62.5%が女性であった。他の大きな綿工場も同じで、ガイエルは 1885 年 40%、1892 年 60%の女性を雇用し、グローマンの工場では 1886 年 54%、1892 年 63%が女子労働者であった[56)]

もうひとつの事象は、企業家による労働者住宅の建設である。ウッジ市の急激な人口増加は、当然市内の住宅事情の悪化をもたらさずにはいなかった。ロシア支配下の政府や地方行政に深刻なその問題を解決する意思も力もなく、多数の労働者を抱える企業家にとっては、労働力確保の面からもそれは自ら解決していく他はなかった。企業家による労働者のための住宅建設の始まりは 1820 年代まで遡る。当時企業家のコピッシュが労働者のために 17 戸の住宅を建設し、11 人の織物職人には住宅建設のための木材を提供している。1830 年にはガイエルが自分の工場の熟練専門職人のために 4 部屋からなるレンガ造りの住居を 5 棟建設した。しかし 19 世紀前半にあっては、これらは例外的な事例であった。企業家による温情的な住居建設が本格化するのは、1860 年代末のことであり、それが最も活発だったのは 1870 年から 1900 年にかけてであった。最大の労働者集合住宅は、シャイプラーの工場、ポズナンスキの工場、ヴィゼフ織物工場 Widzewska Manufakutura（クニツェルの工場）にあった。

56) Sikorska-Kowalska【2003】s.91

1925 年のウッジでの労働監督局調査では、集合住宅を含めて合計 260 棟の工場労働者のための住居があり、3352 家族がそこに住んでいた。ただしそれらの住居に住むことができたのは当該企業に勤める労働者のみであって、工場を失職するとこの住居からも追い出されたのである[57)]。

VI おわりに

以上われわれは、19 世紀半ばから第 1 次大戦までのウッジ繊維工業の発展が、他に例を見ないようなその人口増加をともなっていたこと、それは主に農村からの工場労働者の流入によるものであったこと、彼らは一挙に市内の定住人口となったのではなくて、市の周辺部に分厚い労働者居住区を形成しながら、やや流動的な形で繊維工業労働者層となったこと、その背後に賃金労働をめぐる農民と工場主のそれぞれの事情が重層的に絡んでいたことを見てきた。これまでの研究では主に企業家に焦点を当てて、国外からやってきた企業家がいかにポーランド社会と関係を結ぶかというような観点の分析が多かったが、本稿の分析によってウッジ繊維工業の持つダイナミックな成長力を別の角度から、すなわち労働者形成の視点から内在的な要素と外来的な要素の結合として、改めて確認できたのではないかと考えている。

ウッジ繊維工業の分析で常に外来的要素に注目されるのは、そもそも 19 世紀におけるポーランドの繊維工業は、分割前の 18 世紀後半にポーランドで発展していた手工業やマニュファクチュアの性格をもつ繊維業の伝統を直接受け継ぎ、継続して発展したものではなかったし[58)]、ウッジ市自身の都市の起こりからして、昔から生産的、商業的あるいは文化的な職業に従事していた住人を最初から市民とするような都市ではなかった[59)]。従ってウッジ市の都市としての発展も、その繊維工業の発展も、言うなれば外来的な要素をふんだんに含みながら実現する他はないものだったという理由によるものである。

本稿の課題であった繊維労働力の形成の問題は、いずれの国や地域にとっ

57) Jaskołowska【1973】s.47-48
58) Puś【2003】s.8
59) Missalowa【1967】s.32

てもダイナミックな内部の力と外部との多様な関係を包含するプロセスであって、もともと社会的な複雑性の強いテーマである。このようなウッジの繊維工業の労働者形成であれば、さらに複雑な問題が存在していることは間違いない。その最大のもののひとつは民族の問題であろう。ウッジの歴史分析では常につきまとうポーランド人、ユダヤ人、ドイツ系の人々という民族構成がはらむ問題はここではあえて一切捨象されている。

また、「ウッジ市の人口構成で流入者がこのように多いことから、その性格は登録上はともかく都市住民とは言いにくいことになる。かれらはその出身社会の習慣や風習を持ち込んでおり、社会的には保守的で、その世界観は教会の教えに従属していたし、その生活ぶりは上昇志向でも野心的でもなかった。貧しい社会の出身ゆえに、生活のわずかな上昇でも彼らには大きな成功と感じられたのである。このことが、彼らの文化生活、政治生活、労働運動の形成に重大な影響を与えたのであった」とŚmiałowski が述べ[60]、このように大量の農民が都市に流入し、現代社会につながる全く新しい階層として工場労働者となっていく現象は、彼らの新しい都市住民としてのメンタリティや生活習慣、さらには政治意識の形成等の問題につながる[61]と Missalowa が指摘する労働者形成の社会的な側面にも一切触れることができなかった。それらの問題についてはいずれも今後の研究課題としたい。

参考文献

Długoborski,W. Napływ siły roboczej do przemysłu w krajach Europy środkowo-wschodniej, (w) I.Pietrzak-Pawłowska red., *Gospodarka przemysłowa i początki cywilizacji technicznej w rolniczych krajach Europy*, Wrocław 1977

Gross,F. The working class in Poland, in Mieczysław Giergielewicz ed., *Polish civilization -Essays and Studies*, New York UP, 1979

Janczak, J.K. Struktura społeczna ludności Łódzi w latach 1820-1918, (w) P.Samuś red., *Polacy-niemcy-żydzi w Łodzi w XIX-XXw.* Łódź 1997

60) Śmiałowski【1989】s.47

61) Missalowa【1967】s.42

Jaskołowska, W. Rozwój stosunków mieszkaniowych w Łódzi przemysłowej (do 1914r.), *Rocznik Łódzki*, Tom XVII(XX), Łódź, 1973

Missalowa, G. *Studia nad powstaniem łodzkiego okręgu przemysłowego 1815-1870, Tom II Klasa robotnicza*, Łódź, 1967

Nietyska, M. *Rozwój miast i aglomeracji miejsko-przemysłowych w Królestwie Polskim 1865-1914*, Warszawa, 1986

Puś, W. *Rozwój przemysłu w Królestwie Polskim 1870-1914*, Łódź, 1977

Puś, W. *Żydzi w Łódzi w latach zaborów 1793-1914*, Łódź, 1998

Puś, W. Robotnicy w przemyśle włókienniczym ziem polskich w XIX i na początku XX wieku. Problemy rekrutacji, w Wiesław Puś red., *Studia z historii społeczno-gospodarczej XIX i XX wieku*, Tom I, Łódź, 2003

Sikorska-Kowalska, M. Emancypacja społeczna i zawodowa robotnic łódzkich przełomu XIX i XX w., w Wiesław Puś red., *Studia z historii społeczno-gospodarczej XIX i XX wieku*, Tom I, Łódź, 2003

Śmiałowski, J. *Zarobkowanie pozarolnicze ludności rolniczej w Królestwie Polskim w latach przeduwłaszczeniowych (1815-1864)*(maszynopis), Łódź, 1973a

Śmiałowski, J. Płace i zarobki pozarolnicze chłopów w Krolestwie Polskim (1831-1864), "*Przegląd Historyczny*", Tom LXIV, 1973b

Śmiałowski, J. Uwarunkowania i nastepstwa przemysłowego rozwoju Łódzi, (w)*Pamiętnik XIV powszechnego zjazdu historyków polskich*, Łódź, 1989

Żarnowska, A. *Klasa robotnicza Królestwa Polskiego 1870-1914*, Warszawa, 1974

Żarnowska, A. Zmiany struktury społeczno-zawodowej ludności ziem polskich na tle Europy Środkowej, (w) I.Pietrzak-PawłłĺOwska red., *Gospodarka przemysłowa i początki cywilizacji technicznej w rolniczych krajach Europy*, Wrocław, 1977

藤井和夫『ポーランド近代経済史－ポーランド王国における繊維工業の発展（1815-1914年）－』、日本評論社、1989 年

藤井和夫「19 世紀ポーランドの企業家をめぐって－ 19 世紀前半におけるウッジ繊維企業家の評価を中心に－」、中山昭吉・松川克彦編、『ヨーロッパ史研究の新地平－ポーランドからのまなざし－』、昭和堂、2000 年

藤井和夫「19 世紀の工業都市ウッジにおける民族的共生－多民族社会ポーランドの一側面－」、『関西学院大学 人権研究』6 号、2002 年 3 月